〔研究論文〕

縄文時代集落考（Ⅳ）

後　藤　和　民

Ⅲ　社会組織による段階説（承前）

(Ⅲ)　文化圏説的観点

19世紀後半におけるヨーロッパの思想界を風靡した進化論的旋風も、20世紀初頭になると、ようやくおさまり、各方面において冷静な疑問や反論が提示されはじめた。

当時の進化論主義者に共通した傾向は、まず、人類の文化や社会も生物学的現象と同じく、意志の力ではその歴史は変えられず、法則的に決められた路線上を宿命的に進むものとされた。しかも、当時のヨーロッパ文化を先験的に最高基準と決め、それとの格差によって他の民族文化の高低を一方的に判定し、それを一線的進化の路線上に位置づけようとした。ここには、まだ「救い難い西欧中心主義」の残影が認められる。こうした素朴で専断的な前提の上に築かれた段階説が、やがて崩壊せざるをえないのは、むしろ歴史的必然であろう。

たとえば、タイラーやモルガンなどの初期の文化進化論に対して、その両者の強い影響下にあった後期の進化論者である、かのフレイザー（J・G・Frazer）でさえが、「まったくの原始人から出発し、何千年なしい何百万年もの諸制度に至るという方法で、人間社会の歴史を組み立てることは、想像力の飛翔という価値をもつかもしれないが、学問研究としては、なんの意味ももちえない」（註1）と批判している。

ところが、そのフレイザーは、尨大な資料を収集し、「百科全書的価値さえもっている」といわれる『金技篇』（註1）なる大作を著わしながら、実はヨーロッパより外に出たこともなく、もっぱら図書館で暮らした、典型的な「肘掛椅子の人類学者」であった。このような研究態度に本質的な疑問を抱き、学者みずから対象の世界に身を投じ、実証的フイールド・ワークを積み重ねようとする傾向が、ヨーロッパ各地にも興ってきた。そして、精細かつ集中的な調査が進むにつれて、各地からの多種多様な資料が提示され、もはやそこからは単純な進化論的法則を導き出すことはできなくなってきたのである。

こうした気運の中で、古典的な文化進化論を根底からくつがえす文化圏説が出現したわけだが、ここでは、その前哨や起源となった代表的な観点として、エリオット・スミスの「文化伝播説」およびラッツエルの「文化移動説」を取り上げ、そして文化圏説の総括者および支持者として、シュミットおよびメンギーンの観点について、ごく簡単に触れておきたい。

1，エリオット・スミスの『文明の起源』

スミス（G，E．Smith）は、元来イギリスの解剖学者で、脳の比較研究のため10年間ほどカイロの医学校で、エジプトのミイラの解剖学的研究をおこなっていた。その後ロンドン大学で化石人骨も研究しているが、一時、マンチェスター大学の解剖学教授をつとめたことがある。そのころスミスは、人類文化の発展史に関して、従来の文化進化論にあきたらず、自己の研究成果をもとに独創的な新説を提示した。すなわち、1915年には、『初期文化の移動』（註2）、1928年には『文明の起源』（註3）を著わし、いわゆる「文化伝播説」を表明した。いま、その概要を『文明の起源』によって簡単に触れておきたい。

まずスミスは、人類の「食料採集」と「食料生産」という活動を厳重に区別し、前者の段階の文化を「原始文化」とし、後者の初期の段階の文化を「古拙文化」（Archaic Culture）と名づけた。そして、従来タイラーやモルガンなどの文化進化論によると、今日の文明は世界各地で個別に起り、それぞれが独自に発展したという多元論に基づいているのに対して、真向うから反対の立場に立つて、明確な一元論を展開している。

すなわちスミスによれば、もともと人間は発明能力の乏しいものであり、とくに古拙文化の起源などは歴史上最大の事件である。これほどの発展はごく例外的に恵まれた特定な条件下においてのみ起りうるのであって、別に独立しては二度と再び発生する可能性はない。このような条件は、豊かな自然に恵まれたエジプト以外には、どこにも存在しない。食糧生産を基底とした古拙文化は、エジプトにおいて発祥し、そこで形成され、そこから各地に伝播したのである。極度に単純なものを除いては、他の地域における人類の文化は、すべて航海術の発達とともにエジプトから伝播されたものに違いない、というのである。

しかも、文化は拡大するに従って、必然的に弱体化するから、人間の歴史においては、文化の衰微現象がきわめて重要な役割を演ずる。およそ西暦前4,000年には、宗教、社会組織、結婚制度、弔葬儀礼、家屋、衣服、その他狩猟用具以外のほとんどの道具は、エジプトおよびその周辺地域以外には存在しなかった。そこでは人間も、本質的には類人猿のごとき生活状態であったろう。それが、西暦前3,000年ごろになって、エジプトから新しい文化が伝播し、全面的または部分的に各地の住民に影響を与え、彼等にそれぞれの古拙文化を創造させるに至った。その証拠は、宗教、社会組織、結婚制度等々の文化事象の、エジプトにおける様相と、伝播した先の末端地域における様相との対比により、その衰微・弱体化の現象によって認識される、というのである。

この説は、同じマンチエスター大学の者古学者ペリー（W・J・Perry）の有力な同調を得、（註4）、またケンブリッジの民族学者・リバース（W・H・Rivers）の支持によって、巨石文化、女神像、太陽崇拝などさまざまな資料を列挙しつつ、このエジプト起源説と文化伝播の実相証明を試み、細部の仕上げがおこなわれた。これらの提唱は、おもにマンチェスター大学を中心にして展開されたので、俗に「マンチェスター学派」と呼ばれ、一時イギリスを中心とするヨーロッパの人類学界を風靡するに至った。

この観点は、歴史の発展過程を伝播という現象によって厳密にたどろうとした点に、天才的な予見があり、きわめて啓発されるべき重要な意義がある。とくに注意すべきことは、従来のタイラーやモルガン＝エンゲルスなどの文化進化論における一線的発展段階説が、その文化の起源については、暗黙のうちに多元論を先験的前提としていたことを指摘し、それを吟味したところにある。とくに、各地域における各民族に現存する文化段階が、斉一的な発展法則の路線上におけるそれぞれの民族の到達点を示しているという従来の観点には、それぞれの文化を個別的・封鎖的に捉えようとする静的な傾向があった。これに対してスミスらは、各地域・各民族間における文化の相互影響や交流や移動の可能性に着目し、それを「伝播」という有機的・動的な観点から捉えようとしている。ここに観点の一大転回があり、次の観点へ止揚するための重要な契機となった。

ただ残念ながら、食料生産を基礎とする古拙文化がエジプトにおいてのみ発祥し、それが各地に伝播するという一元論に固執し、しかも、その実証もほとんどが失敗で、エジプト起源という前提自体に実質的な根拠が得られなかったところに、この説の最大の欠点があり、むしろ誤謬の説として否定されるべき宿命にあった。

しかし、この文化伝播説の影響は意外に大きい。たとえば、当時一介の青年学徒にすぎなかったチャイルド（G・Childe）などは、この伝播説から大きなヒントを得て、エジプトを含めたもっと広汎なオリエントが食料生産の発祥地であり、そこからの波状的伝播によって、ヨーロッパ各地に新石器文化が開花したことを、考古学的発掘によって実証し、ヨーロッパ先史の体系に根本的な修正を与えているのである。(註5)

このように、イギリスではスミスらが、文化進化論者の歴史を否定する自然主義的傾向に対して、本来の歴史主義的観点を取り戻していったが、一方ドイツやオーストリアにおける民族学者たちも、同じく歴史主義に基づき、文化における伝播を重要視しながら、人類文化の起源と発展とを同時に考察しようとする動きが活発となった。とくに、スミスらの「マンチェスター学派」に対して、「ウイーン学派」と呼ばれる人々によって、全世界の民族を対象とし、従来の文化進化論に代るべき文化発展に開する大規模な世界文化史として、「文化圏説」が提唱されるに至つた。これが、別名「文化史派」ともいわれ、歴史的民族学のほとんど主流を占める結果となったのである。

2．ラッツエルの「文化移動説」

「文化圏説」の源流は、一般にラッツエル(F・Ratzel）に求められている。彼は元来は地理学者であったが、19世紀後半のドイツおよびオーストリアにおいて、絶対的な権威をもって君臨していたバスティアーン（A・Bastian）に対して、敢然と論陣を張り、古典的民族学の弊風から脱皮し、近代民族学に絶大なる影響を与えた。

(1) バスティアーンの「原質思念」

バスティアーンは、ダーヴィンの『種の起源』が出た1859年に、すでに彼の最初の著書『歴史における人間』（註６）を発表し、1869年には『民族学雑誌』を創刊したほどの先駆者である。しかし彼は、生涯、「民族学の課題は民族の精神文化の領域にある」という観点を堅持していた。

彼の理論によれば、「人間精神の最内奥的性質は、世界のいかなる人種、いかなる土地たるを問わず、その素質と欲求とにおいて本質的には同一である」。しかも、「これらの素質が顕現する様式、種々の道具の発明や社会制度の組成や宗教観念および儀礼形態の表示などによって、これらの欲求が満される様式もまた、本質的には同一である」。「しかじかの変形（といっても本質的なものではないが）、それは、いわゆる『民族思念』Völkergedanke、すなわち民族ごとに異なる風土的、地理的その他の外的事情の相違が作り出すものにすぎない」という。すなわち、種々の民族学的形成物は、地球上の遠隔の各地で、独立的に、人間精神からおのずと発生し得るという、これまた思弁論的多元論の立場に立っている。

ラッツエルは、この「原質思念」の概念に反対し、「事実上の発生地がどこであるかを歴史的個別研究によって確かめるべきこと、しかる後にはじめて心理学的発現のさまを探究すべきこと」を力説している。そしてラッツエルによれば、どこにでも同様の上昇的発展が見られるわけではなく、ある一個所に発生した形態がまわりまわって世界中に拡がり、ついに千変万化する。これが歴史的経過なのだという。

たとえば、現在各地に遠く散在している形態が互に似ているというのは、この事実的・歴史的起源によってこそしばしば説明されうるが、到るところで同一である精神根基Seelengrund から、独自に出現したというのでは説明にならないという。このような形態の分布地域が中絶している場合も、符合点が事物の本質および目的からしておのずから生じたものではなく、またこれに使用された材料の性質からも理由づけられないときは、符合する文化の相互間に発生上の関連があると主張した。このようにして、ラッツエルは「移動説」の創始者となったのである。

この「移動説」の理論をラッツエルがはじめて発表したのは、1889年の『アフリカにおける弓矢の地理的分布』（註７）においてである。この論文の中で、メラネシアのある種の弓とアフリカのある種の弓とを比較して、弓材の断面が一定の形（半円形）をなすのみならず、編んで作った環が弦受けとなり、弦は籐でできているという共通点を発見した。これらの特徴は、別段弓の目的が要求するものでも、機能上の必然性でもない。もし両者の類似性が弓の目的や材料の特質からきているのなら、これらの形態や様式が両民族の地で、それぞれ無関係に独立して生じたといえるし、両民族がかって接触したという結論は引出せない。

しかし、これらの類似性はそうしたものではない。しかも純粋の偶然が、アフリカとメラネシアで、これほど多くの類似性をもつ二つの弓形を、全く相互の関係なしに生ぜしめたということはありうべきことではない。これらの類似性は、両民族が相互間に直接の関連をもっていた時代に起因すると結論せざるをえない、というのである。

(2) 質的規準と量的規準

以上のような「二つの事物の特徴が符合し、しかもこれらの特徴が事物の本性からの必然の結果でもなく、また物質文化の場合には、これに用いられる材料からきているのでもない場合に歴史的関係があるとする法則」を、グレーブナー（F・Graebner)は「形態規準」Formkriterium と名づけた（註８）。この規準だけでも、ある史的関係を証明する力があるが、フローベニウス（L・Frobenius）によって、この研究はさらに拡充された。すなわち彼によって、歴史的伝播は単に一つの文化事象や要素にのみ見られるのではなく、通常は各種の文化要素が相関的に結合しているものであることが確認された。これを彼は、「数量形態」Quantitätskriterium ）と名づけたのである。（註９）。

(3) 文化圏と文化層

比較的広大な地域、たとえば一大陸の全域にわたって、個々の文化領域とその種々の接触地帯および混合地帯を探究してみると、個々の文化領域の相互間にいかなる差異があっても、それぞれの包含するある一定数の要素は、どこでも常に同様の結びつきを示しているという。これらの要素とは、物質的、経済的、社会的、道徳的および宗教的文化など、文化生活に必要なあらゆる部分にくいこみ、したがって、これらの個々の形態によってある一定の性格を刻みつけられた文化の全体を、ある程度に包括しているような要素である。こういう相関関係にある一群の文化要素の分布領域をフローベニウスは「文化圏」（Kulturkreis ）と名づけた（註９）。これらの個々の文化領域が一つの文化圏に共属するということは、個々の符合が数多く存在することから帰結されるのであるから、この場合に効力を発揮するのは数量規準にほかならないという。

ところで、文化圏説は仮説に基づく時間計測の方法をもっている。すなわち、人類は単一的にアジアに起源し、アジアから他の大陸に漸次移動していったとする。この仮設によると、アフリカ、オセアニア、アメリカなどの大陸は、広い通路によってアジアに連続しているわけではないから、航海術の発達していない原始時代においては、せまい陸橋ないし島列の通路を通らねばならない。だから、この三大陸については、古い民族ほど遠くまで進み、新しい民族ほど入口近くにいるはずだというのである。

このような方法を用いれば、個々の大陸における個々の文化圏の前後を決定しうるはずだが、一つの大陸における順序と他の大陸における順序が異っている場合もあり、またある大陸ではある文化圏は全く入らなかった場合もありうる。この場合、文化圏全体の順序を決定するために有用な方法があるという。すなわち、ａ、ある文化圏がその出現するどの地点でも最古のものならば、それは一般に最古の文化圏と認められる。ｂ、ある文化圏が他の文化圏を突き破り、またはこれに重なっている場合、この文化圏はその突き破った地点で発生したのではない。この場合のように、歴史的重層関係として把握された文化圏が「文化層」（Kulturschicht）と呼ばれるのである。

この考え方は、1904年、ベルリン人類学民族学先史学協会において、アンカーマン（B・Ankerman）の「アフリカにおける文化圏と文化層」、（註10）およびグレーブナーの「オセアニアにおける文化圏と文化層」（註11）という研究発表によって明らかにされ、従来、空間的にしか把えられなかった「文化圏」という概念に対して、その時間的重層関係を表わす「文化層」という概念を導入し、歴史的伝播説や移動説を立体的に構成することに成功し、文化圏説の基礎を築いた。

その後、グレーブナーは『民族学研究法』（註13）という画期的な概説書を公刊し、民族学の目的は、人類文化史の建設にあること、そのための方法論として文化圏および文化層の設定をすることを明言した。しかし、これらの文化圏説をもつとも組織的にまとめ上げ体系づけたのは、なんといってもウイーンのシュミット（W・Schmidt）神父であった。

３．シュミットの『民族と文化』

シュミットは、元来カトリックの神父であるが、1893年ベルリン大学を卒業後は比較言語学の研究を進めるうちに、20世紀初頭に興った文化圏的研究に共鳴。以来約20年におよぶその研究成果をまとめ、1924年、高弟コッパース（W・Koppers）とともに『民族と文化』（註12）を著わした。これは、彼の文化圏＝文化層的研究を一つの体係にまとめた概説書として、学史上最高のものという。

本書の体系は、地球上の諸文化を空間的並存の関係におき、数個の大まかな文化圏に分ち、その分布や重なり合いの様相から、これを一定の規準に基づいて文化層という時間的前後関係に位置づけた。そして、その間の歴史的関連を追究し、人類文化発展の形式を、一線的な内的進化の段階としてではなく、文化の伝播や異文化との混交がきわめて重要な役割を演ずる多様な発展過程として把握しようとしている。

以上のような方法によって、シュミットは専門とする言語学的研究を背景に、社会組織を中心にして、次に述べる７つの文化圏を設定し、また経済関係から４つの発展段階を区別し、両者を組み合わせて壮大な人類文化史の骨組を構成した。以下、棚瀬襄爾の整理（註13）によって、できるだけ簡単に概観してみたいと思う。

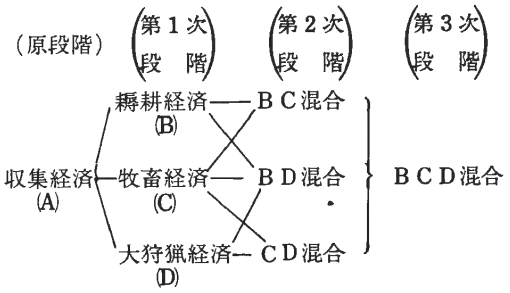
シュミットの分類

まず文化の発展を、経済関係から、原段階、第1次段階、第2次段階、第3次段階という4つの段階に大別する。

「原段階」とは、収集経済の段階にあり、まだ自然の生産力を高める努力はなされず、ただ単に、自然が提供するものを単純に収集し、狩猟し、漁撈するのみ。この段階の文化を「原文化」という。

「第一次段階」では、自然の開発がはじまる。だが、原段階から一本の道を通って牧畜に進化するのではない。原段階（A）から第一次段階に移行するには、3つの主要な経済形態に分れて発展するという。すなわち、原段階で根果の収集を行っていた女性が主動力となって植物栽培に移行するもの（B）、小規模な狩猟を行っていた男性を主動力として牧畜へ進むもの（C）、および、集団的な大狩猟に向かうもの（D）とが生ずる。この3文化は、それぞれ地上の別々の地域において、それぞれの民族の特性に応じて成立した。

この3者が、やがて人口の増加、食糧の不足のために原住地に安住することが不可能となり、移動して第1次段階の3文化が相互に混合するに至る。形成的には、この3文化が2つづつ混合したBC、BD、CDの3つの文化が第2次段階である。さらに、B、C、Dの3つの文化がともに混合したところに第3次段階が生まれ、これが古代高級文化に当たるというのである。これらの関係を図に示すると、次のようになる。



このうち、原段階から第1次段階への発展は、いわば進化によるが、それ自身の内的な力による「内的発展」であり、第2次、第3次の段階は、主として混合という原因によって、外的な力による「外的発展」であるという。以下、各文化の様相について、その要点のみを抽出して、おおよその輪郭を示しておきたい。

(1) 原文化（Urkultur）

人類最初の段階は、狩猟・採集の拾集経済である。この原文化は地球を次のような3つの地域で帯状に囲繞しつつ散在しているという。

A、中央原文化（中央アフリカや東南アジアの熱帯圏におけるピグミー諸族やビグモイド諸族）

B．南方原文化（タスマニアや東南オーストリアや南アフリカ、南米南端などの原住民）。

C．極北原文化（北方および北東アジアの古アジアート諸族、カリブ・エスキモーなど）。

これらもっとも原始的段階にある人間は、進化論者の規定とはうらはらに、合理的で因果的思考をもち、いわゆる呪術的、観念連合的な思考はしない。弓矢を武器とし、元来楯と棍棒はもたず、家は移動式のカマボコ小屋で、身体加工や身体彩色は行われない。固有の言語を有し、これをもって物語、神話、格言、寓話などもつくっている。

男女間には、その性にふさわしい分業が行われ、男性は狩猟・漁撈、女性は採集に従事。そのため女性にも社会的権利が与えられ、配偶者選択も自由。一夫一婦制が広く行われる。婚姻によって新家族は両親から独立するが、その扶養の義務は有する。社会的貧富の差はなく、奴隷制その他自由を束縛する制度はなく、食人や首狩りの習俗もない。彼らの宗教には呪術も卜占もなく、死者崇拝も霊魂信仰も発達していない。ただ、普通「父」という名で呼ばれる至上神（Höchsteswesen)をもち、それに対して形式化しない祈りを捧げ、初物の供物を手向ける。

シュミットによれば、このような状態が現代の文化史的民族学によって知りえた最古人類文化の概観で、最古文化が後期人類に伝承した一般人類的基礎である。しかも、それは決して進化の結果として人類のかち得たものではなく、いわば賜物として人類にその発端とともに天から与えられたものである。とくに家族と宗教・道徳において、このことは明らかである。すなわち、家族は無制限な性欲、いわゆる「乱婚」から発展したというような、進化の過程の産物ではない。乱婚は最古民族においては、その片影すら認められず、程度の差こそあれ、単婚的家族の明瞭にして強固なる形態を見出す。宗教や道徳についても同じで、この最古の形態は規範的自然性に相応するという。

(2) 第1次文化

以上のような3つの原文化圏を包む原文化の状態から、その「内部的発展」によって、次のような3系列の文化が分成されたという。

A．外婚母権制文化圏の耨耕文化

原文化において、根果の採集により植物に関心をもった女性が主導力となって耨耕社会をつくる。ここでは、女性の社会的進出により母権制を登場させ、しかも1部族が2分されてそれぞれ婚姻組をつくる。組の者は互いに他の組と婚を通ずる「組別外婚制」が行われ、子供は母親の組に属す。少女の初潮に各種の儀式が伴い、女性の指導の下で男性は秘密結社をつくり、怪異な仮面を用いる。

家屋の様式は切妻屋根の短形で、舟は側板を補った板張舟が一般化し、オーストリアには樹皮の縫合せ舟がみられる。武器では打撃用、中でも先太根棒が特徴的で、楯もこの文化圏のもの。また、製陶術が現われ、巻上技法が行われる。楽器では多列笛、楽弓などがはじめて登場。装飾文様では円形模様が発達する。

宗教では、農耕と関係のある大地の崇拝、すなわち地母神、女性の社会的進出を伴う母祖神崇拝が強まり、また月が崇拝されて普月女とみられる。死者祭祀、霊魂信仰が発達する。霊的存在の信仰であるアニミズムは、決して普遍的な現象ではなく、まず初期の耨耕文化に現われたとする。

この文化圏で、死者に対する関心の高まるのは、農耕に伴う定住生活に関係があるらしい。しかし、必ずしも祖先を崇敬するという面のみではなく、死霊を恐怖するという面も強く、屈葬や服喪の発達などにそれがよく現れている。一旦埋葬し、頭蓋だけ洗骨し聖物として保存する、いわゆる頭蓋崇拝があり、一般にあの世は地下にあると考える。

メラネシア、ニューギニアの一部などに比較的純粋に残り、インドネシアにも点々と発見される文化圏で、オーストラリアにも断片的に影響を与えている。アフリカ西部にもあるが、後期の農耕文化と混合している。

B．大家族父権制文化圏の遊牧文化

動物に関心をもった男性によって成就された父権文化で、特定の動物を飼育し、食料、乗用などに供するに至る遊牧民の文化圏である。狩猟から牧畜への発展に際しては男性の力に負うところが多く、男性が社会的優位をかち得ることになり、強固な父権社会が発達する。と同時に、牧畜が経済的に利益を上げるためには、多数の畜群を共牧する必要があり、小家族よりも大家族を便とし、また畜群を外敵や猛獣から守るためには大家族の統制を必要とし、ここに父長的大家族が生まれる。

この社会形態は、軍事的にもすぐれ国家形成力を内含する。この文化圏では、男性が優位である半面、女性の社会的地位は著しく低下し、購買婚の形式を取り、処女性を尊重し、血の純潔に強い関心を示すに至っている。

物質文化では、車と反射弓、円筒壁・円錐屋根の天幕家屋が特徴的。宗教方面では、原文化の形態が比較的よく保存されるが、かれらの自然環境である広々とした天そのものを神として崇敬する天神崇拝が行われる。この神は、牧畜民の社会形態が反映して第2次の諸神を従属させており、また牧畜民は好戦的な民族で、英雄崇拝が発達する。

屍体の処理法は、従来は塚葬とされてきたが、現在みるところでは相当複雑化しており、「沈黙の塔」的な非埋葬もこの文化のものらしい。死霊の行方は天であるが、原文化の天には階層がないのに対して、ここでは天にも階層があるらしい。

この文化圏は、シベリアのサモエード族その他のシベリア諸族や中央アジアのトルコ、アルタイ諸族に、その代表例を見出すという。

C．父権的文化圏のトーテム的高度狩猟文化

男性中心に発達した文化圏で、ここに狩猟の手段や方法が完成され、組織的な狩猟が行われるに至る。各部族は、一定の動物と系譜的親縁関係をもつという信仰により、当該動物に対して一定の影響を与えようとする。この宗教的社会的形態がトーテミズム（Totemism）である。これは普遍的な社会宗教的現象ではなく、一定の地域的限定があることが判明。シュミットはこれを第1次文化の大狩猟文化に帰属させたのである。

トーテミズム文化圏は、男性の力で成就されたため極端に男権的で、女性は社会的に後退し、すべての宗教生活や政治生活から除外され、宗教儀礼をのぞきみた女性は死罪になることもある。ここでは、家族の意義は弱められ、氏族の意義が重要になる。氏族はトーテムを共有する親縁者集団であるから、婚姻は氏族外に求めなければならない。これを外婚父権制文化圏と呼ぶ所以である。

男性は社会的地位が高いから、その地位を獲得するため、男子青年には厳重な成年式が課せられる。割礼などは、この時に行われる。

物質文化で特徴的なのは、刺突武器の発達で、打撃武器や防禦武器としての楯が欠如している。衣料ではペニス袋が特色。とくにニューギニアに著しい。家屋は丸形で円錐形屋根。装飾芸術では直線模様が多く、トーテム紋章の模写も行われる。一般に工芸が発達し、別名技術文化ともいう。

宗教では、所によって至上神が残存するが、それも意力的な太陽と融合し、全般的特色としては太陽神が登場する。祖先崇拝の形式も、男性祖先が崇拝され、その祖先はトーテム動物と融合することが多い。呪術の発達もこの文化の特色とみられる。シュミットは、母権文化に登場するト占が受動的であるのに対し、父権トーテミズム文化に現れる呪術の積極性に着眼し、この文化に呪術の現れる理由を、男性による機具の発明によって、外界の征服に対する自信を高めたことと、この文化における部族の固定のために、個人や家族の力が強圧され、そのはけ口として呪術に頼ったことなどに求めている。

(3) 第2次文化

第2次の諸文化圏は、主として外的発展、すなわち文化が混合して成立すること、3つの文化圏が2つづつ混合した場合、当然次のような3つの混合文化圏が成立するという。

A．自由母権制文化圏

外婚母権制の耨耕文化圏と大家族父権制の牧畜文化圏とが交錯して成立したもの。ここでは、社会的に母系制が維持され、母所婚が行われるが、外婚制は消滅する。生業は農耕に家畜の飼育が加わる。家屋は外婚母権文化の踏襲で切妻家屋。

物質文化では、製陶術が発展し、とくに弓の発達が顕著。グレープナーなどは、これを「弓文化」(Bogenkultur)ともいう。編み細工、楯、吊橋などもこの文化の特色で、装飾文様は、ここでは渦巻模様に発展する。

宗教は、外婚母権文化の踏襲で、地母神や月の崇拝、アニミズムの発達が特徴的。弔葬儀礼は一律ではないが、すでに納棺を行ない、頭蓋崇拝もここでは頭蓋そのものに力を認めるに至り、頭蓋の数を競って首狩りへと進むという。

B．トーテム母権制

外権母権制の農耕文化と外婚父権制のトーテミズム文化とが混合して成立する。社会学的には、外婚制は行われず、自由母権制の一種だが、四分制・六分制・八分制などの複雑な区画がみられる。産業では、農耕と狩猟が合体し、物質文化も両者が混合する。宗教上でも、このような交錯がみられ、月と太陽が対象とされ、トーテミズム的増殖儀礼を交えた農耕儀礼が行われ、また動物仮面が登場。呪術とアニミズムもまた混合する。

C．自由父権制

外婚父権制文化圏と大家族父権制文化圏との混合から成立する。ここでは、父権ならびに父系制が確立するが、これとともに絶対首長権が発達し、社会が階級的に組織される。

しかし物質文化では、スーダン文化とポリネシア文化では異なる発達を示し、前者では大陸文化の色彩が濃く、鍛治が発達し、円真鋳腕輪、足輪、半月刀の戦斧、環状鉄把手匕首などが特色をなし、後者では海洋文化の色彩が濃く、金属製品はないが、舟が著しく発達し、片腕木舟、櫂舟、帆舟などが登場している。

宗教においては、スーダンでは大地を妻とする上天の神、ポリネシアでは太陽と太陰の崇拝が合体するといわれるが、大地や太陰が母権文化の影響なしに現れるか否かは検討を要する。だが、マナや社会的タブーはこの文化に特徴的である。

(4) 古代高級文化

これは既存のあらゆる文化的素材が交錯した混合文化。文化の混合は、必ずしもより高いものを生み出すとはかぎらず、時に単なる折衷にすぎず、さらには元来の文化の統一を破壊していることも多い。しかしまた、混合によって文化が互に相制し、より高い文化を創造することもある。ここでは、後者の場合をとりあげてみたい。

この文化を形成する基礎は、農耕文化である。原始的耨耕は、各地の大河川の流域において広大な耕地を得たが、これらの河川では定期的氾濫と人為的方法によって地味が著しく肥沃となった。ために人口が急激に増大し、耕作方法も変化した。

すなわち、ナイル、チグリス・ユーフラテス、ガンジス、インダス、中国の大河などの流域では、大規模な耕作がはじまり、耨は犂に進んだ。

しかるに、これらの農耕の中心地は遊牧民族の生活地帯に取り囲まれているので、この両者の間に平和的もしくは戦斗的な接触混合が行われ、相互に著しい文化的向上を招来する。その第1は経済面で、犂を役畜に曳かせて農耕の能率を高め、その動物がまた田園に肥料をも供給する。

第2は社会・政治面で、大規模農耕の開始と同時に、原始的農耕において占めていた社会的地位は女性から取り上げられ、母権制はほとんど維持されなくなる。とくに、政治的に牧畜民が農耕民を支配し、みづから支配階級の地位を獲得する。農耕民が土地に固着して村落生活を主とするのに対して、交通力により広大な草原を駆馳した遊牧民は、国家を樹立するに至るのである。

その国家権力の増大に伴って、安全圏が拡大し文化的交流が活発となる一方、大衆の力を動員した大建築が出現し、これに伴って造形美術が発達する。血讐に代わった賠償も、はじめ農耕文化に生じたが、国家の出現とともに国家的に利用され、被害者やその家族は賠償の一部のみを取り、他は国家の所有に帰するに至る。

第3に技術面では、トーテミズム文化の参加が著しく、ここに「高級文化」の名にふさわしい技術的発展をとげる。とくに鋳金、ロクロの発明による製陶術の発達、木工における溝彫、鉋、膠の発明、ばね、弁、紡織の発達は特筆すべきである。

第4に宗教上の進歩が顕著で、形式上からみれば国民的宗教で、国家の出現とともに壮麗な寺院が生まれ、儀礼が複雑・華美化し祭司階級も整備されるが、内容上からみれば前代の諸宗教が混合し、いわば多神教を現出している。日神、月神、天神、英雄神、アニミズム、呪術、卜占、犠牲などの共存はこれを示す。またこの混合の中に、国家的統一が反映される。神々の国家的統一による三位神への整理や一神教的傾向の出現、神々の並置による抽象化や儀礼の力の観念から生まれる汎神観の出現がこれである。このような思弁的発達には、文字の発明による反省的精神の発達も大いに関与している。宗教の政治への関与も著しいが、やがて一般社会から独立な創唱的宗教の出現へと向かうのである。

以上のように、シュミットらが「文化圏説」によって書かれざる人類文化史の復原を試みたのはおよそ1915年ごろまでで、その後この説に対する批判が多い。たとえば、科学的客観性を強調する「形態規準」や「数量規準」も、実際にこれを適用する場合、常に主観性が伴い、また数量規準において、単に比較される事例の数が多いというだけでは規準としての意味がなく、「比較される文化現象はそれら諸文化の本質に現実的な光を投じ得るに充分な重量のあるものでなければならない」という批判もある。

とくにシュミットの説の全体的な難点として、「かってのモーガン説などと同様、文化的事象の解釈において、発展的視点と歴史的観点が混同されているということ、例えば、棍棒のあとに耨が発明され、さらにそれから犂が生まれたという解釈は、進化の説明ではあっても、歴史ではないという認識の欠如と、当時まだ全世界にわたる考古学的知見が未発達であったため、文化事象そのものの把握や年代観的解釈に無理がありすぎたということ」が挙げられている（註14）。

このことについては、シュミット自身も、新石器の諸文化と民族学上の諸文化圏との間に、「文化史的関係が存するか否か、存するとすればどの程度にか、この問題は将来、わけても装飾模様の研究、陶器の研究、編細工および織物の技法と作品から、明らかにされることであろう」、しかし「先史学においても、これに必要な個別的研究は今までのところ、それらを総括的に比較して効果を挙げうるほどにはおこなわれていず、民族学においてはなおさらのことである」（註12）といっている。

そこで、このような歴史的民族学と考古学との提携や調和を求める試みもおこなわれ、とくにシュミットと共同研究をおこないつつ、文化圏説の限界や不備を補い、実証的な根拠を与えようとした考古学者として、メンギーン（O・Menghin）をぜひとも挙げておかねばならない。ウイーン大学のメンギーン教授は、シュミットと同じ「ウイーン学派」あるいは「文化史学派」に属しているが、先史学を主とし民族学を副として、尨大なる遠古世界史の体系を樹立した。それは、シュミットの文化圏説の影響がきわめて顕著であるが、民族学や言語学ばかりでなく考古学の研究成果を駆馳したものとして、われわれの見すごすことのできない学史的意義をもっている。

第1表　メンギーンとシュミットの段階説の対比　　（棚瀬襄爾『文化人類学』1950による）

	基本文化（Grandkultur）			部族文化（Stammkultur）		
	前期	中期	後期	前期	中期	後期
メンギーンの段階説	原文化	木器文化（ピグミー）	原石器時代	中石器時代	原新石器時代	混成新石器時代
			骨器文化（エスキモイデ）	牧畜文化（古牧畜的）	——→（馬匹飼育的）	——→（遊牧好戦的）
			刃器文化（タスマノイデ）	大狩猟文化（トーテミズム的）	——→（有角家畜飼育）	都市文化（貴族的）
			握斧文化（アウストラロイデ）	農耕文化（古植物栽培的）	——→（新植物栽培的）	村落文化（農村的）
シュミットの段階説	起源的原文化	ピグミー原文化	原文化	第一次文化	第二次文化	第三次文化（古代高級文化）

4．メンギーンの『石器時代の世界史』

メンギーンは『石器時代の世界史』（註15）において、遠古の文化をまず基本文化（Grund－kultur）と部族文化（Stammkultur）とに区分し、両者をそれぞれ前期、中期、後期の三時期に分けて、総合的な編年を試みている。このうち、基本文化の前期を「原文化」中期を「ピグミー木器文化」そして後期を「原石器時代」とし、この横に牧畜系の「骨器文化＝エスキモイデ」、狩猟系の「刃器文化＝タスマノイデ」および栽培系の「握斧文化＝アウストラロイデ」を並列させた。そしてこれら三時期は、シュミットのいう「原文化」に対応させている。

ついで「部族文化」の前期を中石器時代とし、その中で、原石器時代からの系列により、それぞれ、古牧畜的な牧畜文化、トーテミズム的な大狩猟文化および古植物栽培的な農耕文化を並列させた。これらをシュミットのいう「第一次文化」に対応させている。

また、中期部族文化を「原新石器時代」とし、馬匹飼育的、有角家畜飼育的および新植物栽培的の三種の文化を並列している。さらに後期部族文化を「混成新石器時代」とし、遊牧好戦的文化、都市的貴族文化および農村的村落文化の三種の文化を並列している。シュミットは、三つの文化の主成分が連続しながら発展することのみを強調しているかにみえるが、この中期および後期部族文化においては、文化の相互混合の可能性が多いことを認めているので、それぞれシュミットのいう「第二次文化」および「第三次文化」に対応するものということができる。

そこで、メンギーンの段階説をシュミットの段階説と対比させながら整理してみると、次のようになるという（第1表）。

以上のように、メンギーンは伝統的な「三時期法」を無条件に採用し、それに基づいて「石器時代」を世界史的に解明しようとしているが、その時代区分があまりに一面的である。とくに「木器時代」という設定は三時期法の上からも許されず、まして、「原文化」のような、われわれがまだ経験しない文化を措定するのは歴史学的に妥当を欠く。また、考古学的事実を無視し、頭で描いた想像図に無理やり当てはめようとしている。これは、日本の「新石器文化」が「原新石器文化」の「養豚民文化」（Schweinrzüchterkultur）圏に措定されていることからも明白である（註14）。

このように、「教授が描出した遠古史の相は、非常に思弁的であっても、技巧的かつ精密に過ぎ、実際を距ることが遠い」。とくに「閉却されてならぬのは、Menghin 教授がW・Schmidt 教授の文化圏説に余りにも信頼をおき過ぎていることである」。しかし「遠古史の発展段階は出来る限り遺物に即すべきであって、実は此等に基づいて未開文化の文化圏が設定されねばならない。少なくとも、W・Schmidt 教授の方法論は、逆立ちしていると云われよう。さればかかる段階説に依拠するMenghin 教授の綜合的な遠古史の編年は、根底から再検討を要する結果に陥っているのである」（註16）という。

なおメンギーンが、旧石器文化における二大潮流である握斧文化と刃器文化について、その出現の年代や分布圏の考察から、前者をもって植物が

繁茂し気候が比較的温暖な地帯の、主として根茎採集の文化とし、後者をもって気候寒冷な草原や凍土地帯の、主として動物狩猟の文化と考えた。そして「一口に狩猟採集時代と呼ばれる原始時代に、すでに自然環境に即応して植物中心と、動物中心の二種に大別される経済形態があり、後世の農耕、牧畜という主要な経済形態に対応するものがあることを示唆したのは、現在なお魅力に富んだ考察たるを失わない」（註14）という評価もある。また、「考古学の成果を主とし、これに民族学の研究成果を加え、一つの原理によって組織づけようとしたMenghin 教授の企画は、その成功、不成功とは別に、貴重な試みとして、高く評価さるべきである」（註16）ともいわれている。

しかしながら、いま本稿の対象となっている日本の縄文時代の文化を、このメンギーンの段階説によって把握しようとすると、日本の旧石器時代には、握斧文化も刃器文化も存在するが、それが発展した結果としての縄文時代が、果してトーテミズム的大狩猟文化や古植物栽培的な農耕文化の段階を踏み、有角家畜飼育や新植物栽培がおこなわれたかというと、それらのいずれの文化にも段階にも属さないのである。といって、シュミットのいう「古代高級文化」や、メンギーンのいう、「貴族的都市文化」や「農村的村落文化」にも該当しないのであるから、この文化圏説による世界史的な段階説によっては、日本の縄文文化は把握しえないということになる。この点からみても、この文化圏説は「世界史的」でもありえないし、「歴史的」でもありえないのである。

このことから、「民族学が性急に、自力で遠古史を再構成し得るという考えは、19世紀人の抱いた夢であった。遠古史の研究は、第一に遺物を主とすべきであり、民族学は補助的な意義しかもたぬのである」（註16）とするのは、いささか極論である。逆に、考古学の遺物や遺構や遺跡だけで縄文文化を把握しうると考えるのは、より一層偏狭な観点であり、他愛のない白昼夢にすぎない。いかに「もの」や遺物があっても、それを史料として捉える価値判断や、「ものをして語らしめる」歴史的意識や知識がなければならない。その前提となる基礎的知識を、従来民族学や人類学から得てきたわれわれが、むしろそのことを忘れて、その研究成果を補助的にのみ利用してきたことに、実は本質的な自己矛盾と自己憧著があったのではなかろうか。

（千葉市教育委員会文化課・学芸員）

〔脚註〕

(1) フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』東京（昭和26年）
(2) Smith, G. E, "The Migration of Early Culture" London, 1915
(3) エリオット・スミス著・西村朝日太郎訳『文明の起源』東京（昭和28年）
(4) ペアリー著・加藤一夫訳『古代文明研究・太陽の子』世界大思想全集第65・66巻 東京(昭和6・7年)
(5) Childe, V. G, "The Down of European Civilization" London Newyork, 1925
(6) Bastian, Adolf, "Der Mensch in der Geschichte" 1859
(7) Ratzel, F. "Die geographische Verbeitung des Bogens und der Pfeils in Afrika" (Ber K. S. Ges. Wiss) 1887
(8) グレーブナー著・小林秀雄訳『民族学研究』東京（昭和15年）
(9) Frobenius, F. "Der Ursprung der afrikanischen Kulturen" 1898
(10) Ankermann, B. "Kulturkreise und Kulturschichten in Afrika" Zeitschrift für Ethnologie XXXVII 1905
(11) Grabner, F. "Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanier." Zeitschrift für Ethnologie XXXVII 1905
(12) シュミット著・大野俊一訳『民族と文化』東京（昭和45年）
(13) 棚瀬襄爾『文化人類学』 東京（昭和25年）
(14) 江上波夫「古代社会」『現代のエスプリ』12号 東京（昭和40年）
(15) メンギーン著・岡正雄訳『石器時代の世界史』東京（昭和18年）
(16) 角田文衛『古代学序説』 東京（昭和29年）